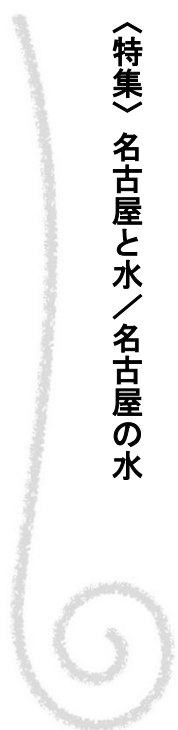


〈特集〉名古屋と水／名古屋の水



日本の三大都市といわれる東京、名古屋、大阪は、とてもよく似た成り立ちを持つ。大規模河川の生み出した広大な沖積平野と海辺近くにせり出した台地。その台地の端に巨大な城郭が築かれ、周囲の低地、さらには海を埋め立てながら都市が拡大していった。羽柴秀吉が大坂城の築城を開始したのが一五八三年、徳川家康が江戸城の拡張に着手したのが一六〇三年、徳川秀忠の命により名古屋城の天下普請が始まったのが一六一〇年。都市の基礎が築かれた時期もほぼ同じである。

もつとも幕府の置かれた江戸や「天下の台所」と呼ばれた大阪とは違い、名古屋の人口は幕末期でも十万人程度にすぎなかった。当時の三都は江戸、大阪、京都で、名古屋は金沢と四、五番手を競う規模だった。そのため名古屋の都市機能はごく一部を除いて台地（名古屋

台地・熱田台地)の上に集中し、低地はもっぱら田畑として利用されていた。

低地の開発は水との戦いである。築堤や河川の付け替え、運河や水路の整備、干拓、埋め立てなど、人々の生活を守り育てるため、多くの事業が必要とされた。名古屋では明治初頭までに、庄内用水の整備、堀川と御用水の開削、大幸川の付け替え、黒川の開削などの治水・利水事業が行われた。

名古屋城の築城とともに台地の西縁に沿って開かれた堀川は、城と海とを結ぶ水運の大動脈だった。往時の堀川沿いには蔵や商家が立ち並び、その面影は塩町、納屋町、木挽町などの地名に今なお残っている。そしてこの堀川の河口、東側の台地に建つのが、古代より草薙剣を祀る神社として栄えた熱田神宮である。江戸時代、熱田の門前町・湊町は東海道五十三次の宮宿として大いに賑わい、次の桑名宿との間には東海道唯一の海上路「七里の渡し」が通じていた。

明治の中頃から、名古屋は徐々に工業都市としての性格を強くしていった。転機となったのは、一八八六年の名古屋駅(旧駅)の開業である。人とモノの流通が増大・加速化していく中、一九〇七年には大型船が入港できる名古屋港が開港、一九一〇年には熱田から台地の東側に新堀川が開削された。その際に出た土砂を用いて整備されたのが、名古屋産業史上画

期となる「第十回関西府県連合共進会」の会場、現在の鶴舞公園である。名古屋で上下水道の建設が開始されたのもこの頃で、一九二〇年代には人口六〇万人を突破、名古屋はようやくにして三大都市の仲間入りを果たした。一九三〇年には名古屋駅と名古屋港を結ぶ中川運河が開削され、陸運と水運の動脈が繋げられた。名古屋駅の移転後、貨物専用駅として利用されていた旧駅（笹島駅）は一九八六年をもって廃止となったが、名古屋港の発展は止まらず、二〇一六年現在、十四年連続で取扱貨物量日本一を更新中である。

名古屋城の築城以降、名古屋の町づくりの歴史を振り返ってみると、そこには二つの大きな断層があることがわかる。一つは今述べた明治中頃に始まる都市の工業化と近代化。これはいわば名古屋の「地」の構造変化である。名古屋城から熱田までの堀川沿いとその東側の台地に集約されていた名古屋の都市機能が、この時期を境に四方に拡大し始めた。

もう一つは、一九四五年の名古屋大空襲によって町が灰燼に帰した後、改めて設計・構築し直された都市の表層である。これは「地」の上に引かれた「図」の書き換えといえよう。互いに影響を与え合う「地」と「図」の変化と書き換えの中で、都市は生き物のように姿を変えていく。その生き物の身体を、あたかも血液のように流れ支えているのが、川や海などの「水」なのである。

本号では、そうした名古屋の「水」をテーマに特集を企画した。水は名古屋の礎であり、豊かさの源泉である。環境省の「名水百選」にも選ばれた木曾川中流域から取水される名古屋の水道水は、そのおいしさに定評がある。またラムサール条約に登録された藤前干潟をはじめ、名古屋界限には固有の湿地環境があり、貴重な動植物の住処となっている。その恵みをどのように受け取り、伝えていくか。そこにはいかなる歴史があり、課題があるか。今回の特集が名古屋と水の関係を考え直すきっかけとなれば幸いである。

武田 竜弥

Nagoya and the Water / the Water of Nagoya: Introduction to the Special Section

Nagoya is one of the most water-rich cities in Japan. It is located in the east of the Nobi Plain, which is formed by the “Kiso Three Rivers,” and faces Ise Bay to the south. The central area of the city is surrounded by the Shonai, Yada, Yamazaki and Tempaku Rivers and even inside of it there are many rivers, canals and marshes. They have not only greatly influenced the city planning and development, including the construction of Nagoya Castle and the Port of Nagoya, which is the largest trading port in Japan, but also are the precious habitats of endemic species in this area. In addition, the tap water of Nagoya, which is taken from the Kiso River, is famous for its highest quality. In this Special Section, we review and clarify the history, roles and importance of the water environment in Nagoya.



武田竜弥 | Tatsuya TAKEDA
名古屋工業大学大学院工学研究科
ドイツ文学・感性社会学
教授